

柴田 実 著

中世庶民信仰の研究

萩原 龍 夫

本書は柴田教授の一六篇の論文を集めて成っている。時期としてもっとも早いのが「生月の旧キリシタン」で昭和二十六年、もっとも新しいのが「衆生擁護の神道」「荒神和讃と夫妻和合、離別祭文」の両篇で昭和三十九年で、その間足かけ一四年にわたっている。教授はこの間においてもこれらと併行して近世庶民教化の研究（その一部は『石田梅岩』『昭和三十七年』『心学』『昭和四十二年』などの著作として刊行された）と地方史（『泉佐野市史』『水口町史』など）民俗芸術の調査研究を進めて来られたのであり、右の宗教史関係の論考の数は多いといえないにしても各篇みな珠玉の作品であることを思うと、教授の平常のたゆまざる研鑽と学問への熱情とがしのばれて、われわれの敬服してやまぬところである。

本書を通じてうかがわれる教授の学問の性格はつぎの諸点をもって代表させ得るかと思う。

第一はきわめて視野が広く、つねに総合的立場にあることである。宗教は人生の窮極の問題であるから、雄大な視野に立って遠観してこそその研究の意義が発揮されるはずであるが、実際には一宗一派にとらわれた物の見方に終始して、研究が矮小なものに

なることが多い。それはどの宗派にあっても悠久の哲理を具える必要があり、そのため幾重にも入り組んだ教説が繰りなされていて、宗教の研究者がそれに眩惑されてしまい、広い視野に立つことが困難になる、という事情のためである。そこで、日本におこなわれる諸宗派の特徴をつかみ、日本人の精神生活にどのような寄与をなしているのかについて、適確な判断をもっているほどの者でないと、日本の宗教史を公正に論ずることは困難なのである。

柴田教授のごとく、長い年月にわたって諸宗派の文化史的思想史的意義役割を観察しつづけた人にしてはじめて、具体的に日本の宗教史についての正しい判断をくだし得るのである。教授がこれまで諸宗派の教説について精細な分析に立ち入られたとは聞いていないが、教授にとつてたいせつなのは日本人の宗教生活の上での具体的な事実なのであり、数千言の教説より一の文化史的思想的事実を導くのである。本書のどこにも宗教の教理上の分析を見出すことはできないが、古代から近世初頭にかけて日本人の生活体系と思想とを形づくるのに与かった諸宗教の具体的なはたらきはまことにいきいきと述べられており、これはとりもなおさず教授の学問の性格が積極的ににじみ出たものと認めることができる。

第二に民俗学と歴史学との融合である。民俗学は新興の学問であって方法論の上で明確でないところが未だに多い。したがって歴史学とどのような関係交渉に立つかについても一定した見解が認められていない。そうした実情のなかで、本書に於ては両者のみごとな融合が実現しているのにわれわれは気づく。日本の民間信仰のなかでもっとも顕著な現象は氏神信仰と御霊信仰との微妙

な関係であつて、この二つのものの概念的定立は柳田国男翁にあって終生の努力目標であつたのだが、本書ではそれが中世の社会的推移のなかで、たえざる流動のうちにも一定の村落の信仰形態をめざしてまとめられてゆく経過についてしばしば触れられており、民俗学と歴史学とのこの共通課題が巧まずして解決に向かっているのを看取することができる。何故そのような成功が勝ち得られたかといへば、教授の長年月にわたる民俗探訪（しかも文化的に重要なメモントを含む近畿の諸地域を中心とした）が、ゆたかな資料を蓄積定着させて、教授が史料を分析される際の母胎の榮養源としてのほたらきを果すからである。推察するところ、教授のこころには、近畿の諸地域の生活史がつねに描かれ、必要に応じて近畿全般ないしは日本全般への総合的理解に向けてそれら生活史的事実は編成されるのであらう。一々の年代誌的叙述はこと繁雜でもあり、ほとんどを教授は省いておられるのだが、それらは畳みこまれて、いつでも全般的イメージ形成に役立てられるようになっていたのであらう。（もっとも本書で年代誌叙述を行なっている個所があり、それは京都の祇園社についてであるが、これは中世庶民の活動の一つの典型と見なされるからである。）今後歴史における民俗学的方法の採用はますます進み、その方法的根拠も旺盛な論議の対象となるであらう。その際本書のように、巧まずして両者の総合ないし融合を実現させた業績のあることをわれわれはきつと思ひ浮べることであらう。

第三は庶民に対する深い愛情である。何といつても歴史学は官府の学であつたのであり、権力の推移・転換のあり方にその主力が注がれることは今後もかわらないであらう。権力に遠いへだたり

をもつ庶民の生活事実をたずねることは、歴史学としてはきわめて地味な仕事であり、教授がそうした「歴史の脇街道」に没頭して来られた間には種々の障碍が横たわつていたことであらう。しかし、いったい、名もなき民に対する愛情をもたずして、何の学問的權威があらう。歴史学はいま転換を内外から求められており、真に民衆のためになる学問に脱皮しようとしている。本書に流露している、中世民衆へのゆたかな思いやりは将来のすべての中世史家に要求される資格条件といえよう。本書が時代の進運に添つて、中世史の新しい試みとして先鞭をつけたものであることを、本書を熟読する者すべてが誇とするに至るにちがいない。

以上、本書に収めた一六論文に共通するところの学問的性格および方法上の特徴を述べた。わたくしの如き浅学の者にはけっきよく称讃の一語に尽きるのである。しかしながら、ただ一つの点においてわたくしは不満の念をおぼえる。それは著者が往々用いられる「村落共同体」なる用語に、内容的説明の乏しいことである。中世庶民の実情を理解するためには中世の村落の構造に対する理解が必要なのは勿論であるが、和泉国日根庄の荘民の生活に諸般にわたる共同性が見られるからといって、一般に「村落共同体」が形成されていたとするのは如何であらうか。中世の村落を「惣村」的形態で代表させるならばとにかく、中世村落の構造・性格には多分に地域差のあることが考えられ、古代村落ともなればなお一層のことであらうし、中世から近世への転換がどのようなものであるかについてもまだ一致した見解はできていない。そうした事情から、明白な規定なしに「共同体」と命名することは誤解を招きやすい。中世の村落には、地域差その他の要因により、

「共同体的性格」の濃いものと淡いものがあるとは言えようが、その場合にも共同体の規定を下した上でないと無意味であろう。しかも古代に近づくほど、史料の乏しさからそうした性格づけは下しにくいであろう。いずれにしても村落構造の研究が未発達なため、論理的前提にひかれやすい現状であるから、その手続をばぶいてはならないと思う。

なおごく小さなことであるが、二二頁の「古事記」は「日本書紀」の誤、一六六頁の「所令隨身於山野」の返り点も誤と思われる、一九七頁の「村人（むらうど・もうと・もうと）」のもうとについては説明がないと納得しがたい。これらはほんの例外であり、全体にわたり円熟した表現に満ちており、きわめて論旨明快である。もとより浅学のわたくし如きものの批判の限りではないのであるが、編集部より求められるままに、僭越をおそれつつ記した。著者ならびに一般読者の寛恕をお願いする次第である。

(A5判 三〇〇頁 昭和四十一年十月 角川書店刊 定価一八〇〇円)
(明治大学教授)

日本宗教史研究会 編

日本宗教史研究

I 組織と伝道

II 布教者と民衆との対話

古 田 武 彦

一

昨年より相次いで刊行された兩著（後述ではⅠ・Ⅱと記す）は、広大な日本宗教史の各領域に対して加えられた、二十六人の斬新な攻究をおさめたものである。

ともに二百ページ余の、まとまった体裁ながら、「論、古今東西に及ぶ」研究対象をもつ、このような著述は、平常中世思想史の一角に踞踏している、わたしのような研究者の書評能力をはるかに越えているというほかはない。けれども、わたしがこの兩著を読み終えてのち、一種爽快なイメージにつつまれて、脳裏におびただしい研究意欲上の刺戟を残されたのは、なぜであろうか。

おもうに、この種の編著のおちいりやすい陥穽たる、エンサイクロペディア風の無味乾燥さと、これは無縁である。しかも、これは単なる「羅列された論文集」ではない。各研究者が得意の領域についてのびのびと語り、日本宗教史の座標上の自己の地点に立って、そこから望見し得る史的イメージを明かしているからである。